

The Gallery voice NO-65

編集・発行／ 画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 番地／TEL (098)888-6117 / 2022.3.10
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa・Japan www.galleryokinawa.com

おだやかな風景の彼方に

上原誠勇



「丘の上の村」(油彩・F30号)

画家、高江洲盛一さんの記憶をたどるには、その事象が40年近くも前のことで、私の頭の中に残るわずかな記憶も薄く色褪せ、少々不安を抱いてしまう。1981年10月にスタートした画廊沖縄の立ち上げ企画「現代沖縄絵画50人展PART-4」や、「沖縄の現代絵画60人展」(沖縄山形屋7Fで開催)等にご参加いただいた。さらに画集『沖縄現代画家78人集』(月刊沖縄社発行・1982年)の取材で、那覇市末吉のマンションに住む高江洲さんのアトリエへ、何度か訪ねたことがあった。

60歳の画家と、当時30代の若造のやり取りは、何を話したか、実はほとんど記憶にない。口数が少なく、寡黙な印象であった。ただ顔写真用の撮影でカメラを向けたとき、下着のTシャツ姿で応じるその気負いのない眼前の画家は、自然体であり、日常であり、自身の画風の中に住まう人そのものだった。

その『沖縄現代画家78人集』に残る作品は、緑の小高い丘にコンクリート住宅が点在するおだやかな風景や、森の木々や畑の緑に囲まれた、のど

かな那覇近郊の風景である。「末吉の朝」、「首里風景」、「松川風景」。戦後30年近く経過した1980年前後の集落のたたずまいである。ユンボ重機で敷地をならす音も聞こえるような宅地造成、その「復興」風景をも入れ込む画面には、静かで緩やかな風がなびいている。

今回の美術オークションに出品された2点の作品は、高江洲の作風の流れから1980年～90年の晩年に描かれた作品と思われる。「丘の上の村」は、手前に砂糖キビ畑が広がっている。運玉森の近辺であろうか？米軍基地が少ない沖縄南部の農村風景とも考えられる。さらにもう1点の「陸橋のある風景」は、復興期の古島バイパスの高架橋工事か？安里の交差点か？



「陸橋のある風景」(油彩・F30号)

しかし残念なことに、高江洲盛一(1922年～2013年)についての記述や資料は、あまりに少ない。より詳しく知るため、高江洲家と交流のあるTさんから連絡先を教えてもらい、埼玉県に住む高江洲盛一の息子さんに連絡を取った。偶然にも、その日2月19日は、高江洲の誕生日であった。電話口には、高江洲盛一の息子さんの奥様が出られ、幸運にもお話をうかがうことができた。以下お話いただいた内容の一部を記載する。

戦後は那覇高校の近くで似顔絵を描いて暮らしていたと、義母から聞きました。義父はあまり戦争の事を話しませんでした。・・・ほとんど話さなかった。

また後日、高江洲盛一の息子、博さんにもお話をうかがうことができた。

私が中学生の時、父は大嶺政寛先生や大城精徳先生とよく酒を飲んでいました。平成元年に家を新築した時に那覇市末吉のマンションを引き上げて埼玉に引っ越し同居しました。病気がちで、何度も入退院を繰り返しました。2013年に亡くなりました。

ご冥福をお祈りしますと言って電話を切った。

高江洲盛一は「終戦と昨今の思い出」と題して機関誌『新生美術一第2号』（新生美術協会発行/1983年）に執筆している。画家を知る貴重な記録と思われるので一部以下に引用させていただく。

一終戦の時、私は北鮮にいた。その夜始めて灯火管制が解かれた。(略)・・・雪深くなる頃シベリヤ鉄道を貨物列車で、モスクーに近いカザンの南のクゼルターウンと云う町に連れていかれた。約一月位貨車に乗った。貨車を下りて三日三晩目的地迄歩かされたり、倉庫みたいな建物に入れられたりした。昼もらった黒パンを後で食べようとしたらコチコチになっていた。夜の雪明りの中に黒く浮き上がった風車が未だ頭の中に残っている。たまに通る部落の民家からもれる灯が今でも目の前にちらつく。

それから収容所生活を二ヶ年余りやったけど、そこで私は始めてスケッチらしいまねごとを始めた。兵隊になる前に水彩を少し描いていたけど、入隊と同時に終戦まで描く事から完全に離れてしまっていた。それでも終戦の時には十二色の色鉛筆を持っていた。捕虜になってから幾らかの金をもらったので、水彩絵具とノートを買った。そして収容所内の建物とか、隣に見える寺院とか周囲の人等を描き始めた。(略)・・・(収容所)の小さな展覧会で一等賞をもらったのは一年余り過ぎた頃だった。(略)

それから私は現代の苦悩とか、社会性とか、内容についてもそれほどむつかしく考えない。いつでもよく見られた風景を描いている。そこには私の生活があり、日常的な思考も働いている。

とにかく私は具象画が好きであるが、抽象画でも気に入ったときは、とことんまで眺めている。ぐんぐん引っぱられて何かを感じるときがある。

高江洲はまた、1955年の第7回「沖展」で久保田賞を受賞する。以後、「東光会」に出品し1956年には名渡山愛順、大城精徳等と「美緑会」立ち上げに参加し、晩年まで活発に活動している。後に「琉美展」、「赤土会」、「三人展」、「四人展」、「創元会」「新生美術協会」と琉球・沖縄の風土(クリマとローカリズム)と伝統文化にこだわりつつ、その趣旨にあったグループへの参加を続けていく。



「芒原の中の野菜畑」(油彩・F30号)

那覇市栄町で金物店を営みながら、絵画制作を続けた高江洲は、県外に住む息子さん家族を度々訪ね、当地埼玉の農家や畑、水田のある日常風景も描いていたようだ。

戦後「復興」の風景を淡々と見つめる画家の眼差しは、その背景を知るにつけ、胸を打つ。皇民化教育と出兵、異国での戦争体験と敗戦、そしてその後のシベリヤでの抑留生活。更に郷里沖縄での米軍統治時代と日本復帰。激動の時代を生きた画家が描いた「生活」は、人々の何気ない日常やその営みが、いかに尊いものであるかを、おしえてくれるようである。

(うへはらせいゆう/画廊沖縄代表)

これからの金城次郎

倉成多郎

金城次郎が亡くなって18年がたつ。その作風に魅かれファンになる人は今でも多い。多くのファンがいると、様々な主張が飛び交うことになる。「この「次」は次郎が書いたのか?」「この魚は次郎が描いたのか?」「おれはわかる。あいつはわからない。」・・・

いつの頃からか、土作り、ロクロ、装飾、焼成を作家本人が一貫して行うのが陶芸だという考え方が優勢になると、工房で家族や弟子と一緒に制作していた陶工たちの作品を巡っているいろいろな混乱が起こることになる。

金城次郎の作品も、ロクロも模様もサインも全て次郎本人がしたものに価値が置かれることになるが、あえて暴論を申せば、そんなに重要なことなのですか? 重要なのは心ときめく金城次郎作品に巡り合うことだ。



金城次郎「線彫双魚文皿」

かつて濱田庄司は、バーナード・リーチからキビ文の模倣が多いので注意したほうがいいと忠告されたとき、「自分の方が良ければ真似する人の良い物は自分のものになり、自分の出来の悪いのは向こうが引受けるだろう」と冗談を飛ばした。これからの金城次郎の作品との接し方とは、本当に作品だけと向かい合い、心ときめく作品とできるだけたくさん出会うことだと思いたい。

金城次郎は10代半ばで壺屋の新垣栄徳の工房で働き始め陶技を磨いていく。長いキャリアをもつため作品は、端正な赤絵から、歪みや釉の垂れ・亀裂もものともしない躍動感のある作品まで

幅が広い。非常に多作で生涯に産みだした器の数も膨大である。



金城次郎「線彫エジプト文壺」

私が特に心惹かれる金城次郎の作品は、形が炎によって歪んだり、厚塗りの釉薬が垂れて高台から棚板まで流れたり、青い呉須釉（酸化コバルト釉）が高温でにじんだりした作品たちだ。なぜかそれらの作品の方が、釉薬が美しく発色し、器の面を釉薬が走りまわり躍動感があり、またその形も高温に耐え抜いたたたずまいを見せるからだ。金城次郎が陶技を学んだ壺屋地域では、今日では焼成に失敗したとされる作品でも、使用に耐えるなら、市場を変えて販売された。それが壺屋の売り方であり、金城次郎も受け継いでいる。形の歪み、釉薬の垂れやにじみ、亀裂といった現象は、高温になりすぎることによって発生することが多い。しかし、釉薬が最も輝いて発色し、我先にと動き出し器面に躍動感をあたえるのも高温になりすぎるギリギリの温度を耐え抜いて踏みとどまった器だからこそである。歪み、がたつき、釉薬も高台下まで垂れてしまっても、それでも美しいと思える焼物を作ることが出来たのが金城次郎である。なぜ金城次郎にはそれが出来たのか。今でも、これからも、多くの問いかけを見る側に投げかけてくのが金城次郎の作品なのである。

(くらなりたろう/那覇市立壺屋焼物博物館主任学芸員)

第25回美術オークション作品一覧

The Gallery Voice No-65.2022.3.10 画廊沖縄

1		大嶺政寛	「八重山風景」
2		儀間比呂志	「浜」
3		幸地学	「ニーラ」
4		金城次郎	魚文カラカラ ぐい呑みセット
5		新垣勲	線彫 魚文壺
6		金城次郎	線彫 エジプト文壺
7		金城次郎	線彫双鱼文皿
8		與那覇朝大	練り込壺
9		屋良朝春	「屋さがりの 伊平屋島」
10		仁王	唐草文 六寸皿
11		琉球古典焼	緑釉搔き落
12		小橋川源慶	飴釉緑釉 水差茶碗セット
13		小橋川源慶	亀甲文 平チューカー
14		小橋川源慶	飴釉緑釉 平チューカー
15		島袋常孝	幾何文 抱瓶
16		小橋川源慶	盛付パパイヤ文 徳利
17		小橋川源慶	盛付芭蕉文 酒壺
18		古倉保文	琉球玩具 「鳩」
19		古倉保文	琉球玩具 「トウケイ」
20		稲嶺成祚	「五月晴」
21		小橋川源慶	緑釉飴釉 流し壺
22		國吉清尚	角皿
23		屋良朝春	「馬天港の町」
24		座波政秀	「集落」
25		稲嶺盛吉	琉球ガラス グラスセット
26		稲嶺盛吉	琉球ガラス 泡グラスセット

27		稲嶺盛吉	琉球ガラス グリーン
28		稲嶺盛吉	琉球ガラス ブルー
29		前田孝允	彫漆 「いじゆの花」
30		中村徹	風景
31		黒潮波男	「昭和15年頃の 泊高橋」
32		仁王	赤絵 七寸皿
33		小橋川清次	黍灰釉壺
34		小橋川清次	緑釉掛分壺
35		島袋常明	エジプト文 蓋付飾り壺
36		玉那覇有公	「鶴」
37		高江洲盛一	「丘の上の村」
38		高江洲盛一	「陸橋のある風景」
39		上江洲茂生	緑釉搔落 タワカン壺
40		上江洲茂生	壺
41		屋良朝春	「シーサー」
42		玉那覇正吉	「むくげと廃船」
43		玉那覇正吉	「トレドの街」
44		石嶺傳郎	「風景」
45		山之口獏	思弁の苑 -僕の詩-より
46		ジャック・ デベルト	「アメリカの ゴルフ場」
47		山里昌弘	「花」
48		宮城健盛	「菖蒲」
49		前田孝允	「鶴」
50		前田孝允	「与那国風景」
51		儀間比呂志	「鳥のアンマー」
52		與那覇朝大	「遠い海」